

第三部 祈りと神秘体験

一章 祈り

正直言つてこのテーマを扱うのは気がひける。言うべきことは全てイエスが完べきに、そしていつの時代にも当てはまる形で述べているからである。そう言いつつも、大霊との感応の手段としての祈りについて述べることにしたのは、クリスチャンの中で福音書に出てくる「主の祈り」(後注)の真の意味、とくに祈る者の側の心の姿勢について述べている深い意味を十分に理解している者が極めて少ないからである。

訳注——マタイ伝とルカ伝にほぼ同じものが出ている。マタ

イ伝によると——

「天にまします我らが父よ、

願わくは御名の崇められんことを。

御国の来らんことを。

御意ごいの天に行われる如く、

地にも行われんことを。

我らの日々の糧を今日も与え給え。

我らに負債ある者を許した如く、

我らの負債をもお許し給わんことを。

我らを試みに遭わすことなく、

また悪より救い給え」

例によってこれにも諸説があり、中でも有力なのが「我らの日々の糧を……」云々以下は後世の付け足しであるという説である。いずれにしてもギリシャ語に通じていたマイヤースのことであるから、ギリシャ語の原典を念頭に置いて述べていることは間違いないであろう。

キリスト教国に生をうけた我々は、二十世紀もの長きにわたって、祈りの行為をしれば冒瀆し誤用してきている。自分の利己的目的のために用いてきたということである。例えば戦争になると敵をやっつけてくれるように祈ってきた。あるいは自分たち少数の「神に選ばれし者」——事実を言えば教団の中で勝手にそう決めたに過ぎないのだが——への特別の思し召しを嘆願し、他の人類一般が求めているものは無視してきた。

さらには、我々はよく上手な言い回しをこしらえてきた。言うなれば言葉の手法で、それを意味も考えずに口にしてきた。先輩たちがこしらえた決まり文句を、あたかもその言葉自体に魔法的な力があるかに思い、それを口にした時の音声そのものが願い事を叶えてくれると信じてきた。キリスト教の歴史上で今日ほど「主の祈り」の真の意味を反省し「祈り」本質と効用の再検討が求められている時代は無いのではなからうか。

かく言う私は永遠の大道を地上の人間よりは少しばかり先を旅してきて、その間に、祈りというものの効用は本質的には当人の魂の姿勢にあり、口にする言葉ではないことを学んでいる。神に呼びかけて心を赤裸々に開いて嘆願する者は、まずもって自らが最も厳格な意味で清純でなくてはならない。

大靈への要求または懇願に利己心はないか、私利私欲が混じってはいないか、その点を自らに問わなくてはならない。

また人類への同胞愛と宇宙の神秘への畏敬の念にあふれていなくてはならない。言い換えれば小さな地上的人間性から脱して、全生命の魂と交わろうとする精神にならなくてはならない。そうした精神状態においてであれば、神に近づき、言葉で要望を述べ、あるいは内なる悩みを打ち開けることも許されるであろう。他人への報復はもつてのほかであるが：

低劣で、祈りとは言えない形での祈りは、戦争とか疫病とか経済的大恐慌などの時によく見られる。その種の祈りは神への冒瀆であり聖靈への罪である。しかし、もしも人生の苦難、孤独感、絶望感に苛まれた時に衷心から援助と慰安を求めるのであれば、それは決して間違つてはいないし、きつとドアを開いてくださるであろう。ただし、その祈りへの回答は必ずしも当人の望み通りのものとは限らない。なぜなら人間は所詮は永遠の巡礼の旅人であり、ただ辛いから、耐え切れないからというだけで、歩まねばならない道程が変更してもらえないものではないからである。

そこで、自分自身のこと祈願をする時は靈的資質を求めて祈ることである。物的必需品や苦難の軽減は他人のために祈ることである。『主の祈り』には日々の糧を求め文句があるが、完全に幼な子のごとき心になり切れば、それも許されるであろう。従つて、祈りの中でも最高といえるその

『主の祈り』を口誦する時は、この世的な大人の心理から幼な子の純真無垢の心境に切り換えなくてはならない。キリス

ト白身、別のところでこう述べている——「汝ら心を入れ替えて幼な子のごとくならずんば神の国へ入るを得ず」と。(マタイ)

それゆえ祈りの行為に入る時は神の国へ入ろうとしていることを忘れてはならない。即ち、ちまちまとした日常の煩悩の世界から無限の世界へと入るのである。永遠の生命と一体となろうとするのであり、従つて純心で一途な目的をもち、疑念や恐怖心や不信、その他もろもろの地上的煩悩を捨て去らないといけない。なぜなら、そうしたものが神の国への門を閉ざすからである。

以上私は祈りというものについて概略的に述べた。これを細部にわたつて本格的に書くとすれば、神へ近づく道について一冊の本が出来上がるであろう。しかし、いかなる祈りにせよ、祈る場所によつて神聖化されるものではないことを知つていただきたい。寺院、教会、大聖堂、こうした場所は大靈との交わりを得ようとするその心を正しく導く上では効果があるかも知れないが、世俗から隔絶した山中でも、小我から脱するための条件は同じである。要するに恐怖心、不信、利己心、怒り、嫉みといった煩惱を振り落としさえすればよい。こうした雑念は小鳥を捕らえる罠のようなもので、祈りの翼をもぎ取ってしまう。

かもめを思い浮かべていただきたい。断崖絶壁にある巢を飛び立って地球を離れると、海の上を素早く、そして雄大に飛翔し、気流に乗って高く高く舞い上がって行く。人間が祈る時は、このかもめのように魂を世俗から断絶して飛翔させ、創造の大靈を求めて上昇しなくてはならない。

私の説くところは完べきを要求しているかに思えるかも知れない。が、各自それぞれの分に応じて努力すればよい。各
自の知性ならびに情的本性に依じて、私か述べたことを人生
に応用していただきたい。ただし、一つだけ共通して言える
ことは、口にする祈りの言葉の背後に確信と誠意がなくては
ならないということである。たとえ教養はなくとも幼な子
のごとき純心な羊飼いの方が、教会の最高の地位にある者よ
りも天の父のもとへ確実に至ることも有り得る——無心に、そ
して信念をもって祈ればのことである。

そういう次第であるから、年令を重ね、青年期から中年期
へと至り、煩わしいことや複雑な人間関係でがんじからめ
になった中で祈る時は、より慎重に自己を見つめ直し、神に向
かって自分の願い、あるいは他人のための願いを申し述べる
ということとは、取りも直さず神の聖域に足を踏み入れること
であることを忘れないでいただきたい。

● 集団での祈り

集団での祈りは一人での祈りよりさらに難しい。いっしょ
に祈っている他の人々の声によって気が散漫になり、全体の
雰囲気を引き込まれてしまうからである。

しかし、一堂の者の心が一つになり、魂の奥から祈ってい
る時は強烈な靈力を生み出すものである。大靈のもとに届く
だけでなく、暗い世相の中でインスピレーションの火花とな
って、祈りなど思いも寄らない無明むみやうの人々の心を明るく照ら
し出す。と言うのは、熱誠と信念をもって口ずさまれた思念
は、いかなる距離をもものともせず、エーテルのネットワー

クを伝って地球の果てまでも届き、当人は気づかなくても靈
的知覚に響いて影響を及ぼすものなのである。

それゆえ集団で祈る時、全身全霊を込め、よほどの必要性、
よほどの目的をもって祈れば、それは時が至れば豊かな実り
をもたらすタネ蒔きをすることになる。

しかし改めて注意を促すが、機械的な祈り、型にはまった
口先だけの読経では、誠意もなく、魂の輝きもなく、慣れ過
ぎているために生命が通っていないので無意味である。

英国国教会には「祈禱書」というのがあり、それをを用いて
「嘆願ソリタリ」という儀式を行うのであるが（訳注——牧師の唱える
祈願に唱和して会衆が短い祈りの言葉を述べる）、それを聞いてい
ると。「見せかけの謙虚」とも呼びたい特有の響きがある
のに気づく。牧師も会衆も口を揃えて哀れな罪人つみびとである自分
たちを救い給えと嘆願するのだが、それは口先だけの話で、
心の中では哀れとも思っていないし、罪の意識もない。私に
言わせれば、自分のつまらなさを強調することで偉大なる神
を懐柔しようとしているようなものである。

そもそもその程度の祈りで聖なる道に入れるとしたら、あ
まりに軽薄すぎないだろうか。なるほどエイドスの世界にま
で突き進んでいる先輩たちに比べれば、地上の人間は靈的発
達の点ではいかにも粗末で哀れに思えるかも知れない。しか
し、リタニーを口にする会衆はそんな事実を知るよしもない。
それゆえ、この特殊な祈りも、他の多くの祈りと同じくムー
ドにごまかされないように用心した方がよい。もしもその祈
りの言葉に何の感動も覚えない時、あるいは自分および他人
の行動に照らしてみても真実味が信じられない時は、いっその

こと無言のままでいた方がましてある。

私は今では、知的偽善というものが自分でも気がつかない敵であって、祈る者が陥る危険性の中でも最も危険度の高いものであると信じている。それゆえ祈る者は、一途さと視野の広さによってその偽善を克服し、さらに祈りを永遠なる大霊との霊的交わりの手段とするための唯一の魂の姿勢を、自らの努力で身につけたいものである。

これまで私は死後の世界での祈りについて語っていないので、これから少しばかり述べておこうと思う。

例の「最後の審判日」まで眠り続けると信じているクリスチャンは、当然、死後に祈る必要など有るはずがないと言うであろう。その論理から言えば確かにその通りである。なぜなら、祈りには努力がある——つまり魂の必死の努力を要するのであるから、それは眠っていては出来るはずがない。しかし、これまで私か説いてきた通り、魂の旅は永遠に続くのである。努力、葛藤、そしてそれを克服した時の勝利は、新約聖書の中で「われらの父の多くの館やかた」と表現している界層から界層へ至るまでの道程において体験されるものである以上は、そうした厳しい試練の中で神を求めて祈る——人間より遙かに真剣に、そして「祈り」の真実の意味において、熱誠をこめて祈る必要性が生じるはずである。

有限の状態から無限の境地へと突入するのがいかなるものかは、地上の人間には到底理解し得ないことであるが、私も含めてエイドスの界層にいる者にはそれが分かる。同じく

「われらが父」に向かつて呼び掛けるのであるが、われわれにはその「父」なる存在の神秘について人間より遙かに深い

認識を体得し、祈りの行為について遙かに大きな畏敬の念、即ち大神へ近づくための行為であるという敬虔な気持を抱くのである。

エイドスの世界ではわれわれは類魂団と合流し、多くの仲間の存在を意識し、祈る時も一体となつて一つのハーモニーをかもし出す。それは地上の集団から発せられるものなどとは比較にならない、敬虔そのものの大祈願となる。至聖なる大霊の存在を地上の人間より遙かに強く意識しているために、その霊的影響力の中に容易に、そして適切な状態で入り、願いを披瀝ひれきすることが出来るのである。

今私は「神の御前に進み出て」と述べた方が人間には分かり易いところを、敢えて「その影響力の中に容易に入り」と表現した。宇宙にあまねく存在する大霊の存在を正しく表現するものが他に思い当たらないからである。影響力の中にも視覚には何も映じないのである。それは譬えてみれば、薄い雲に被われた太陽は姿は見えなくてもその光が温かく包んでくれるように、類魂団がごぞつて讃仰の祈りを捧げる時には、大霊の影響力がわれわれを温かく包んでくれるのである。太陽の直射のように大霊の光を直接受けるには、魂の内的視覚がまだまだ弱すぎる。それで薄い雲のように最後のベールが大霊の光を遮り和らげている。

それでもわれわれは自分の全存在にその影響力が沁みわたる鼓舞してくれるのを実感し、温かさ喜びと慰めと靈感を授かるのである。

その時の歓喜の体験を叙述することはとても不可能である。それが私にも体験できるのは、先輩の類魂たちがエイドスの

界層より一段高い境涯へ進んで祈りを捧げる時に、私も乾坤けんこん一擲いつてきの決意のもとに精神的な大飛躍を試みる時のみである。しかも私に許されるのは少しの間で、先輩霊だちと最後までお伴をすることは不可能なのである。

地上からやってくる無数の靈的巡礼者がそれぞれにこちらでどのような形で祈りをしているかを細かく述べるのは、今の私にはその余裕がない。ただ一つだけ理解しておいていただきたいのは、意識の階梯を一つ一つ昇っている者たちにとって、地上時代の信仰がいかなるものであったにせよ、その時代よりも現在の方が祈りの真実味と重要性とが遙かに増しているということである。地上時代にはその鈍重な肉体が魂の感性を鈍らせ、厚い雲のように死後の世界の光を遮っていたということである。

睡眠とともに一日が死んで行く。その睡眠中に靈界の仲間とともに高い境涯へ至って真実の祈りを体験したければ、同じ意味において、つまり昼間が夜へと移行するように、あなたも死ななければならぬ。即ち肉体の束縛から完全に解放されなくてはならないという意味である。そうすれば最早や物的感覚を意識することなく、魂が内奥の靈と融合して一体となり、高い世界へと飛躍して、無心の熱情と熱誠をこめて大靈への祈りを捧げることが出来るであろう。

長い地球の歴史において、靈性高い宗教家や純粹無垢の平凡人でさえ、稀にそうした完べきな祈りの境地を体験した人があるものである。そういう人は大体においてそのこと、つまり神の国に踏み入ったことを口にしないものである。

ここでこのようなことを引き合いに出したのは、「信仰は山

をも動かす」というのはそういう意味において真実であることを述べたかったからである。即ち全身全靈をこめて祈れば、ごく稀にはあるが、エイドスの世界よりさらに彼方の境涯で体験される神との交わりを、この地上にあっても体験できるということである。

● 絶望の谷間にあつての祈り

平凡な人間がたどる一生には、ささやかな悩みや悲しみは免れないとしても、まずまず幸せといえる時代が多いと見てよいであろう。仕事と娯楽の日常生活が根本から揺さぶられるような大事は滅多に起きないものである。

しかし、身分の上下、男女の別を問わず、生涯に一度や二度は胸の張り裂けるような悲しみや大病、あるいは事業の破綻といった凶事に見舞われることも事実である。それがどういふ形を取るにせよ、その人の日常生活は歯車が狂い、おのれの弱さ、人間が根本的には精神的に孤独な存在であることを思い知らされるものである。最早や援助してくれる者はどこにもいない。援助の手を差し延べてくれる神様がいようがいまいが、今はおのれの小ささと欠点を赤裸々に直視させられる。

そうした言うなれば魂の暗黒の中にあつて神を見出すにはどうすべきであろうか。絶望の谷間にあつてその暗黒から這い出て、見えざる存在“即ち大靈を見出すにはどうすればよいのであろうか。

そんな時こそ“祈る”のである。イエスがゲッセマネの園で祈ったごとく、祈ることによってのみ自分が孤独な存在で

ないことを悟ることが出来る。今の自分にとってどうしても必要なものを申し述べるか、あるいは“主の祈り”を繰り返して唱えることによって絶望感を克服し、孤独と思えた時にもかの“靈的影響力”に包まれていたこと、そしてその大靈は夜通し自分とともにいてくださることを知るであろう。

かくして祈りによって“我が父”とのつながりが出来れば、嘆願したことが叶えられ、苦悩は上着を脱ぐごとく取り払われるであろう。それは同時に魂が高揚され拡大する時でもあり、その完全な無我の境地において、かつてなかった力と決意とを授かるであろう。

それゆえ、祈ることとそれがもたらしてくれる大靈の遍在についての確信は、多分、あらゆる敬虔な行為の中でも、魂に生ずる結果が最も重大無比なものと言えるであろう。

「父よ、願わくばこの苦しみを取り除き給え。されど、もしもこれがあなたのお思し召しであるならば、私の願いではなく、あなたの意思のままに為さしめ給わんことを」

地上生活という短い生命の旅において、もしもイエスと同じカルバリの丘（絶体絶命の窮地）に立ち至った時は、このイエスの祈りの言葉をその受難の谷底から叫ぶがよい。繰り返して繰り返して叫ぶがよい。必ずや救いの手が差し延べられて勝利を手にするであろう。

● 讃仰と感謝の祈り

神を讃^{たた}え敬意の念を捧げる行為は各個人とその創造者たる神との間の問題である。精神的静寂の中にあつて敬意と讃^{さんぎょう}仰の念——やむにやまれず湧き出る至聖なる大靈への名状し難

い思いを伝えるためには、生きていくという、生命そのものへの感謝と崇敬の念に満たされなくてはならない。

その心の姿勢はさきに述べた、救済を求めての祈りと相通じるものが幾つかある。やはり大切なのは魂の状態、われわれ個靈と大靈との間の交感を可能にする姿勢である。私は、われわれが世界各国で生み出されている大交響曲に耳を傾けている時、それは神への讃歌を聞いているのと同じだと考えてよいと思う。大作曲家によって書かれたシンフォニーは讃仰のラプソディ、われわれの魂を至聖の存在へ向けての音波に乗せてくれる捧げものであり、ただただ、創造主へのやむにやまれぬ崇敬の念に頭^{こぶし}を垂れさせるのである。

無言の祈りの方が言葉で述べるよりも強力となることは有り得ることである。魂は静寂の中の方が大靈との交わりが得やすいからである。しかしそれは地上の人間の大半にとって、口頭で述べるよりも困難であろう。それゆえ、口頭でもよいから、哀願にせよ懇願にせよ讃仰にせよ、あるいは良心の呵責の告白にせよ、明瞭な言葉で述べるがよい。それは各自の靈性に応じて宇宙のメロディをうたうことになるであろう。生きとし生けるもの全てがその分に応じて創造主へ向けて祈りを奏でているからである。

無神論者といえども一度や二度は、人生のどこかで絶体絶命の窮地に陥り、懷疑主義の鎧^{よろい}の紐を解いて、存在しないと思っているはずの神に向かつて叫び、自らこしらえた闇を突き通して嘆願を送り届けることがあるものである。われわれは絶えず何かを創造し形成し、そして時間という書物の中に刻み込んでいる。自分という粘土ばかりでなく、自分特有の

宇宙という粘土をも練り上げ、潰してはまた練り上げている。

各自は自分特有の宇宙の中に住みたがる傾向があり、それは地上的宿命の一部であると言える。その証拠に、極めて稀にはあるが、ふと自分が孤立状態にあることに気づき、その観念に、あたかも大地震に見舞われたように圧倒される。しかし、自らこしらえた隔離された宇宙から脱け出る手段が用意されている。それが「祈る」ということである。祈りのドアをノックすることである。きつとそのドアが開かれ、孤独の中にある者に遍在する大霊の宇宙が啓示されることであろう。

● 運命と祈り

私はいわゆる運命論者ではない。あらゆる事があらかじめ書き込まれていて絶対に変更されることはないという説は取らない。運命は祈りによって変えることが可能なのである。ただし、人間が想像するような方法で変えられるのではない。当人の靈性の変化を通して変えられるのである。つまり試練とか苦難を実体験として必要としなくなるような靈性の改革を通してである。

全身全霊で、しかも悔恨の真情をもって述べられた祈りは、必ずや大霊に届くものである。そして妥当と判断された回答が形成力をもつ靈力となって送り返されてくる。その通路は、ほかならぬ祈りが大霊に届いた時にできたものである。その聖なる靈力は人間の内なる存在と融合し、またその一途な欲求に動かされて人間性そのものを變化させ、無骨さを柔らげ、歪んだ精神に美しさを賦与し、魂の土壌を潔め、弱点を強化

する。

かくしてその地上の巡礼者は、過ちの根源である靈的本性の歪^{いび}みの修正のために用意されていた試練ないしは苦難を、祈りによって克服する。言い換えれば、その災厄からの釈放を、祈りによって、全身全霊を込めた口頭の祈りだけで獲得したことになるのである。

しかし、最も高尚で荘嚴な祈りは、哀願でもなく、嘆願でもなく、讃仰でもない。それは息子と父親との親密な靈的交流にも譬えられるべきである。息子が叡知の泉である父親に裁断と助言を求めるといふ形での交わりである。

叡知、真理の正しい判断力、日々の諸事における正しい行為、一日中いついかなる時と場所においても正しい思考をする——こうした才覚を求めて、弛^{なほ}むことなく、そして熱情を込めて祈りたいものである。そして又、今も述べたごとく、祈りの本質は未熟な息子と大智大悲の父親との靈的交わりであるとの確信を忘れぬように心掛けたいものである。

● 静寂

辺りは世俗の雑音に取り囲まれている。生活の重荷と重責が肩に重くのしかかり、ほんの一時たりともその重荷を下ろして人生の道端で休みを取り、内なる自分の静寂の中にこもることが出来ない。しかし、本当はそうした静寂の中にこそ魂にとっての必須の安らぎがあるのである。健康で無傷で人生を生き通したければ是非とも必要なものである。

「心静かに瞑想し、我れこそ神なりと悟るべし」(祈祷書)
——この言葉には平凡な生活に明け暮れている者には、多分、

謎めいた響きを感じるであろう。しかし、この言葉は地上世界の大真理の一つを含んでいるのである。無音と隔絶の世界に入ることによって我々はあらゆる仮面と見栄を棄て去ることがができる。虚栄心と偽装から解き放される。そして厳しい現実と向かい合い、たとえささやかであっても自己反省に努力し、その反省からさらに奥深く入って瞑想の域に達し、受身ではあっても神の声を聞くことができる。

私は今最大限の敬虔な気持を込めて「神の声を聞く」という表現をした。これは永遠の大霊を無感覚で感識することを意味する。試練と苦難の後に、日常の浅薄な意識を抑制し、静寂と隔絶の中において遂に神の驚異に触れ、「神の中に生きそして存在する」(使徒行伝) ことを知るのである。

そうした言葉を実際の体験によって理解する人がいかに少ないことか。しかし、一度体験し、一度理解したならば、それはその巡礼者にとって忘れようにも忘れられない破天荒の征服であり、肉体に対しての精神の勝利であり、そして、それまで盲目だった男がイエスの霊力によって全く新しい驚異の世界を見たという、あの奇跡にも譬えられるほどの内的感覚の発現である。

いや、この譬えでもまだ妥当とは言えまい。自我の牢獄から初めて解放され、万物の大霊との静寂の中での一体化によって味わったエクスタシー(忘我の喜悦)をうまく表現しているとは言い難い。

静寂の中での一体化にも無数の段階がある。隔絶と無音の静寂の中であって突入する状態が無数にあるということである。最初の段階は、同じく光でも、自分の霊の光輝に出会う。

穏やかな光である。大霊の光ではないが、その光線によって魂が刺激を受ける。これが第一段階である。第二段階に入ると地球の魂(訳注——国魂のことに察せられる)との触れ合いを意識する。そして第三段階で、厳しい鍛練と内観の末に、完全な静寂の中で「神の声を聞く」ことになる。

無論その霊的喜悦の境地へ至る道は各自が自分で見出さねばならない。が、いかなる方法にせよ、知っておかねばならないことは、そのエクスタシーの頂上に長時間とどまることは出来ないということである。人間の限界として、いかに条件が整っていても、地上の時間にしてせいぜい数秒間しか、その気高い空気は呼吸できない。しかし、主観的には一世紀も閱したかの意識を抱くであろう。實在というものはそれほど強烈にして荘嚴なるものであり、その強烈な静寂の中にあつては、神の御胸に帰る長き巡礼の旅路における他のいかなる体験をも凌駕する。

しかし、この超物質的体験に関連して、時間というものを地上的意味ないしは物的な意味で述べるのは適当でない。そのエクスタシー、神との交わりの時間とも言うべきその瞬間は、そこまで高まり行く過程は長い時間を要しても、あたかも灯台の光が闇夜の海を照らす、あの一瞬にも満たないであろう。

静寂を求めて瞑想に入るに当たっては、まず「自分」に係わる全ての雑念を払い除けないといけない。そのための一つの方法としては、何でもよいから「完全体」を象徴するもの、言い換えれば個別的存在ないしは部分的存在のイメージを与えないシンボルを心に描くことである。描き続けているうち

に、徐々に自分という意識に変化が生じ、「自我」へのこだわりが緩みはじめる。それは他でもない、脳の神経細胞によって縛りつけられている肉体感覚が薄れて行きつつあるのである。

やがて最初の静けさを実感する。何やら宙空を滑るような、あるいは深い淵へ沈み行くような、そして感覚的なものから解き放たれるような感じがする。そして次の瞬間、エクスタシーを体験する。

昼が夜に支配権を譲り、辺りの無数の人間の脳が活動を停止した時は、その「無我」のエクスタシーに入るのが容易になる。自然を友としている人であれば、丘の頂上でもよい。日頃の仮面を脱ぎ、ありのままの自分になり切って、超人格的存在である地球の魂に対すれば、静寂と安らぎを見出すことが出来るであろう。それは目に見えなくても直ぐ近くに存在し、自分の内にもあり外にもある。にもかかわらず、それを見出すには超人的努力を要するのである。

全ての人間——たとえ懐疑論者であっても、あるいはキリスト教徒であっても——今述べたような要領で努力すれば、自我の谷間から這い上がり、時間と空間から脱して、宇宙の永遠のリズムの響きを感じ取ることが出来るのである。無論、各自の才覚に応じたものであるが……

「心静かに瞑想し、我こそ神なりと悟るべし」——この言葉には、この地上にありながら目に見えざる宇宙の内奥へと誘ってくれるものを秘めている。遠くへ足を運ぶ必要はない。今その場において——少なくとも条件さえ整えば——生命の旅の終焉に近づきつつある高遠の世界の魂が、言語に絶した、

そして地上の人間の理解を完全に絶した境地で体験しているものと同じエクスタシーを、ほんの一瞬ではあっても、体験できるのである。

マイヤースの通信 個人的存在の彼方 心の道場

Geraldine Cummins